

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

Asian Excavated Jew's Harps, A Checklist(3) : Lamellate Harps(3) and Bow-shaped Harps(1)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 直川, 礼緒, Tadagawa, Leo メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1197

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



アジアの発掘口琴チェックリスト(3) : 薄板状の口琴(3)と湾曲状の口琴(1) Asian Excavated Jew's Harps: A Checklist (3) - Lamellate Harps (3) and Bow-shaped Harps (1)

直川礼緒 TADAGAWA Leo

ユーラシア大陸を中心に世界中に分布する、始原的な楽器である口琴は、いつごろ、どこで、どのように生まれたのだろうか。これまで「アジアの発掘口琴チェックリスト(1) : 薄板状の口琴(1)」(2016)、「アジアの発掘口琴チェックリスト(2) : 薄板状の口琴(2)」(2017)で、アジアとその周辺地域で発掘された口琴の検証を行ってきたが、補遺・続編として、本稿では、新たに情報が明らかになった、紀元後3～5世紀のロシア連邦アルタイ共和国発掘の薄板状の口琴を採り上げる。

また、紀元後5世紀を現時点で最古のものとする、ロシア連邦沿海地方、中国黒竜江省などの、湾曲状の金属製の口琴についても検証し、日本の埼玉県出土の3本の口琴も紹介する。

キーワード : 口琴 Jew's harp、音楽考古学 Music archaeology、
古代楽器 Ancient musical instruments、北方アジア Northern Asia

12. ロシア連邦アルタイ共和国 Altai Republic, Russia [52-56]

一昨年および昨年の論考以後、いくつかの新たな情報が寄せられた。そのひとつが、昨秋(2017)発表された、南シベリアのアルタイ共和国北部マイマ地区マンジュレック村の二つの遺跡で発掘された、5本の骨製口琴(部分および完成前のもの)である。

マンジュレックの北5kmほどの、カトゥン川沿いにある、「マイマ文化に属する」チェレムシャーンカ Черемшанка 土壘跡から、2017年夏、ロシア科学アカデミーシベリア支部の調査により、2本の破損した口琴が発掘された[52, 53]⁵⁸。有蹄類の動物の骨製で、「3本の歯を持つ櫛に似た形」をしており、「2000年程前の物」とされていた⁵⁹。

後に公表された記事(リエソフスカ Liesowska 2018)⁶⁰中の写真(fig. 28, 29)によると、最も原形を保った1本[52](fig. 28, 29の4)⁶¹は、長さ110mm、幅86mmとされているが、図版中に付されたスケールと比較してみても、幅の寸法の記載は明らかな誤植であろう⁶²。全体の形は、基本的に長方形だが、歪んでいる。引き紐を取り付ける方の端が丸みを帯びており、手で保持する方の端は、破損して失われていると考えられる⁶³。振動弁の根元側の枠に、引き紐を取り付けるための穴が開けられており、この点は、これまで検証してきた中国遼寧省[12-13]、同内蒙古自治区[01]、北京[02-05]、モンゴル[06]、ロシア連邦トゥヴァ共和国[07]、同ハカス共和国[08-09]の出土口琴と共通する、重要なポイントである。

チェレムシャーンカ土壘出土のもう一本[53](fig. 29の5)に関しては、現時点では詳細な情報はない⁶⁴が、写真を見る限り、[52]と同様の形状を持つ口琴が破損し、その枠部分の片側のみが残ったものの様にも見えるが、口琴であるとする判断材料がどの程度説得力

のあるものなのかは、今後の情報や調査を待つ必要があると思われる。しかしながら、ロシア科学アカデミーシベリア支部では、口琴（の一部）として扱っている模様なので、本稿もそれに従う。

チェレムシャーンカ土壘の近くにある、紀元前5世紀から紀元後3世紀のチュルトコーフ遺跡・川床9 Чултуков Лог-9からは、口琴の制作段階途中の骨辺が3点出土したとされている[54-56] (fig. 29 の1, 2, 3)。これらも、[53]同様、現時点では写真以上の情報は不明。特に[54, 55]に関しては、なぜこの板状の骨片を、口琴の制作段階途中の物であると判断したのかも、よくわからない。[56]については、振動弁の形のような傷跡があることから、口琴を作ろうとしていた、と考えられなくもない、といった程度ではないだろうか。機会を見て、発掘を担当したロシア科学アカデミーシベリア支部の研究者の意見を確かめたい。いずれにせよ、現時点でのロシアの考古学会では、これらの遺物も口琴（に関わるもの）として扱われている模様なので、本稿もそれに従うものとする⁶⁵。

リエソフスカの記事中では、チェレムシャーンカ出土の2本は、1,560～1,740年前、フン-サルマタイ時代に作られたものとされている。とすれば、紀元後278～458年ごろ、すなわち紀元後3世紀終盤から5世紀中盤のもの、ということになる⁶⁶。骨は「牛または馬の肋骨」と、情報がより限定されたものになっている。

また、記事中では、どのように肋骨から骨の薄板を切り出すかがイラスト入りで紹介されている。円筒形の肋骨を二つに「割り」、内側に生じる平らな部分を利用して作られていることが、これらのアルタイの口琴の特徴であり、「より長い骨を使用する、トゥヴァやモンゴルのもとは異なり、より発達した製作技法を用いている」としている。

なお、同記事中に、アルタイ人の（薄板状



fig. 28 ロシア連邦アルタイ共和国チェレムシャーンカ土壘出土の口琴[52]。リエソフスカ 2018 より

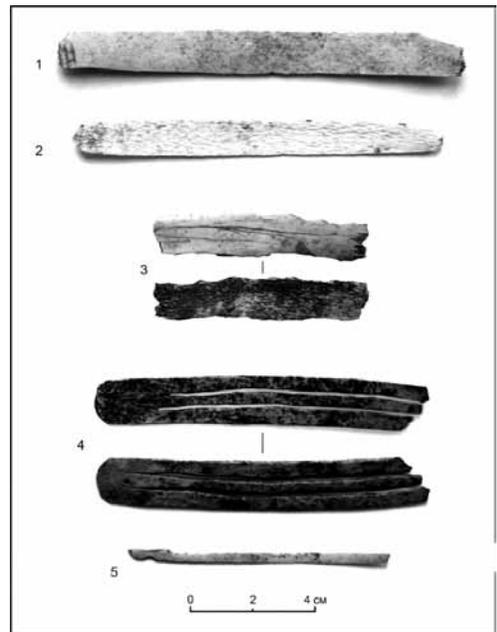


fig. 29 ロシア連邦アルタイ共和国チュルトコーフ遺跡・峡谷1およびチェレムシャーンカ土壘出土の口琴。上から[54, 55, 56, 52, 53]。リエソフスカ 2018 より

の骨製の) 口琴の民族例の写真が掲載されているが、その形は、アイヌ民族のムックリヤ、ロシア連邦ヤマロ-ネネツ自治管区ウスチ-ヴォイカル土壘出土の骨口琴 [10]、そしてキルギスの現行の木製口琴ジガチ オーズ コムズなどとよく似た、振動弁に「肩」があり、引き紐を通す穴が、枠ではなく弁に開けられた A2 タイプ⁶⁷のもので、[10] の検証の際に挙げた問題⁶⁸ の逆の状況が起こったように見え、これも謎である。

アルタイ共和国と言えば、「アルタイの王女」として知られる、見事な刺青の入った女性のミイラが発掘された、モンゴルとの国境付近のウコク高原にあるパズィルィク (パジリク) 古墳群 (紀元前 3 世紀前半頃) をはじめとする、重要な遺跡を多く抱える古代文明揺籃の地であり、そこに暮らす人々が (文化としては別の物に属するかもしれないとは言え)、紀元後 3 ~ 5 世紀に薄板状の紐口琴を持っていた、ということは、意義深い事実である。

13. ロシア連邦沿海地方 Altai Republic, Russia [101-105]⁶⁹

湾曲状 bow-shaped の口琴 (本稿では B タイプとする) は、多くの場合、鉄・銅・青銅などの枠と、鋼・ベリリウムブロンズなど、弾力を持った振動弁、という 2 つの異なる素材の部品を組み合わせて作られている。現行例は、ユーラシア全域の様々な民族によって演奏されている。また、考古学的な出土品としては、ヨーロッパ地域では、非常に多くの発掘例が知られるが⁷⁰、そのほとんどは、12 ~ 13 世紀以降のものである (Kolltveit 2006)。唯一の例外が、ルーマニアとウクライナに国境を接する東ヨーロッパの国、モルドヴァ共和国で出土した、9 世紀の物である⁷¹。それでは、ウラル山脈より東の、アジア地域では、B タイプの口琴の発掘品は、どの程度見られるのだろうか。

薄板状 (A タイプ) の紀元前 22 ~ 11 世紀には及ばないが、現時点で世界最古の B タイプの口琴は、ロシア連邦沿海地方ウラジオストク近辺の遺跡で発掘されている。それが、沿海地方南部の、日本海に面したパルティザン地区にある、アンドリアノフ居住地 Андрианов Ключ の鞅鞅の遺跡で 2013 年に発掘された、紀元後 5 ~ 6 世紀のものである (fig. 30)。レシチェンコとプロコペツによれば、全長 60mm、最大幅 12mm、振動弁はほとんど失われている (Лещенко & Прокопец 2015)。この遺跡からは、鞅鞅文化としては珍しく、鉄製品を含む多くの遺物が出土しているとのこと⁷²。

両端を先細りに (おそらく鍛造で) 成形した鉄の角材を、ヘアピン状に折り曲げた、「環状部の円形部分」が少ない枠の形である。その角材の、稜線の部分を向き合わせて (正面から見ると ◆ — ◆ の状態で) 使用している点により、明らかに「口琴の音はどうすればよく出るのか」を意識した製作者によるものであると考えられ、他の目的で作られたものである可能性は、ほぼ否定され得る。さらに、枠の環状部底部には、振動弁の一部が、カシメて留められているのが明確に観察される。全長 60mm というサイズは、現行の民族例としてのキルギスのテミル コムズ



fig. 30 ロシア連邦沿海地方アンドリアノフ居住地出土の湾曲状の口琴 [101]。レシチェンコとプロコペツ 2015 より。直川 1996 中の註 12 の原則 (通常の演奏状態を、観察者側から見た状態に楽器を置く) に従い、180 度回転させてある

がほぼその大きさである。ごく一般的な、少々小型の口琴である、ということができる。

同じく沿海州では、少々時代も下った、9世紀の渤海の口琴 [102] が、同じ2013年の夏に発掘されている (fig. 31, 32)。ニコラエフカ-I Николаевка-I 土塁という、パルティザン地区からは80kmほど北西に位置するミハイロフカ地区の、ニコラエフカ村の南3kmにある遺跡からの出土である⁷³。

レシチェンコとプロコペツによれば、全長80mm、幅19～9mm、途中で折れている振動弁の、残っている部分の長さは23mmとなっている (Лещенко & Прокопец 2015)。

[101]と同じく、先細りの鉄の角材を、ヘアピン状に曲げた、「環状部の円形部分」が少ないフォルムの杵。振動弁の杵への接合部は、写真と実測図だけからははっきりとは分らないが、杵の中央に穴をあけて、平たく成型していない状態の弁の後端を通して留めているように思われる。振動弁の基部の幅が広く、杵の環状部に於いても、弁と杵との隙間が狭く作られているのが特徴だろう。実測図に付された、杵の「角材の断面が菱形」であり、その鋭い方のエッジを向き合わせて使っていることを示した図から、製作者の、音の発生に関してのより細やかな配慮が感じられる。

さらにもう1本が、沿海地方アヌチノ地区スモーリノエ村のスモーリノエ Смольное 居住地で2007年に発掘されている [103] (fig. 33)。ニコラエフカからは、20km程度の距離にある、紀元後9～11世紀の女真の遺跡とされる (Лещенко & Прокопец 2015)⁷⁴。

口琴の全長は、96mmとやや大ぶりになる⁷⁵。現行の民族例としては、東シベリアのサハ共和国に住む、サハ民族のホムスが近い。ただし、幅は28～11mmであり、やはり「環状部の円形部分」の無い、ヘアピン型である。2本の腕部の先端は、5×6mm程度、振動弁の幅は5mmとなっている。

レシチェンコとプロコペツでは、もう一本、より早い時期に発掘され、「青銅のヘアピン」と位置付けられている遺物にも言及している [104]。同時代(両者の言う「中世」すなわ



fig. 31 ロシア連邦沿海地方ニコラエフカ砦出土の湾曲状の口琴 [102]。写真提供：姜仁旭 Kang In Uk 慶熙大学校人文大歴史学科教授

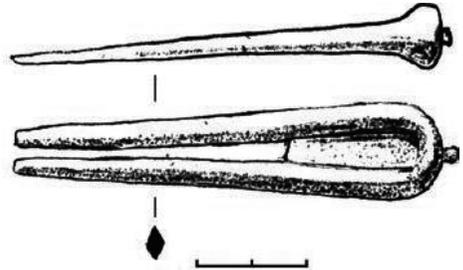


fig. 32 同上 [102] 実測図。レシチェンコとプロコペツ 2015 より



fig. 33 ロシア連邦沿海地方スモーリノエ居住地出土の湾曲状の口琴 [103]。写真提供：姜仁旭 Kang In Uk 慶熙大学校人文大歴史学科教授。この写真も、180度回転させてある

ち鞅鞅～渤海の時代)の遺跡シャイギンスキイ土塁 Шайгинское городище 第73住居から出土したもので、ニコラエフカ砦出土の口琴 [102] と形がよく似ており、振動弁を取り付けるためのスペースもあるため、実際は口琴であるとしている(図・写真は未見)⁷⁶。

さらにもう一点、沿海地方アヌチノ地区で発掘された、11～12(あるいは12～13)世紀の女真のものとされる口琴 [105] が、ベスクローヴヌイ (Beskrovny 2013) に見られる (fig. 34)。アマチュアの考古学研究者による発掘であるらしく、サイズなどを計測した報告書も出版されていない模様だが、写真中のライターの大きさは一般的には80mm程度であるので、そこから判断すると、全長約90mm強といったところか。振動弁の基部が、杵の環状部にぴったり合った形である点は、[102] と同じ意図が感じられる。



fig. 34 ロシア連邦沿海地方アヌチノ地区出土の湾曲状の口琴 [105]。ライターと口琴の間にある「棒」が何であるのかは、不明。写真提供：ベスクローヴヌイ

これら5～13世紀にかけての沿海地方の口琴群は、以降に述べる平安時代(10世紀前半)の埼玉県出土の3本の口琴と、時代的にも、また地域的にも(日本海を挟んで)非常に近い関係にあり、全くの私見であるが、何らかの交流の可能性があったことは間違いないように思われる⁷⁷。

14. 中国黒竜江省 Heilongjiang Province, China [106]

レシチェンコとプロコペツによれば、中国黒竜江省綏浜県の同仁 (Тунжэнь/Tongren) という遺跡から、全長110mmの湾曲状の口琴が出土しており、中国の考古学界では、「釘の曲がったもの」と認識されているとのことである。時代もはっきりとは記されていないが、出典は明記されており、そこには図も載っているようなので、折を見て情報を収集したい⁷⁸。より広い環北日本海の口琴文化圏が存在していた可能性も出てくると思われる。

15. 日本埼玉県 Saitama Prefecture, Japan [107-109]

日本国内では、埼玉県から3本の湾曲状の鉄口琴が出土している。発掘当初は、本州以南の地で、大型の金属口琴が発掘されたという事実が、あまりにも唐突であったため、その信憑性を疑う向きもあったが、こうして、大陸側の同時代の発掘品の存在がわかってくると、それほど奇異なものには思えない。むしろ、世界最古のBタイプの口琴文化圏の一翼を担っていた、重要な地域としての日本がクローズアップされるのではないだろうか。

なお、今回は、日本の発掘口琴に関しては、図版を紹介するにとどめ、考察は次回にまわしたい。

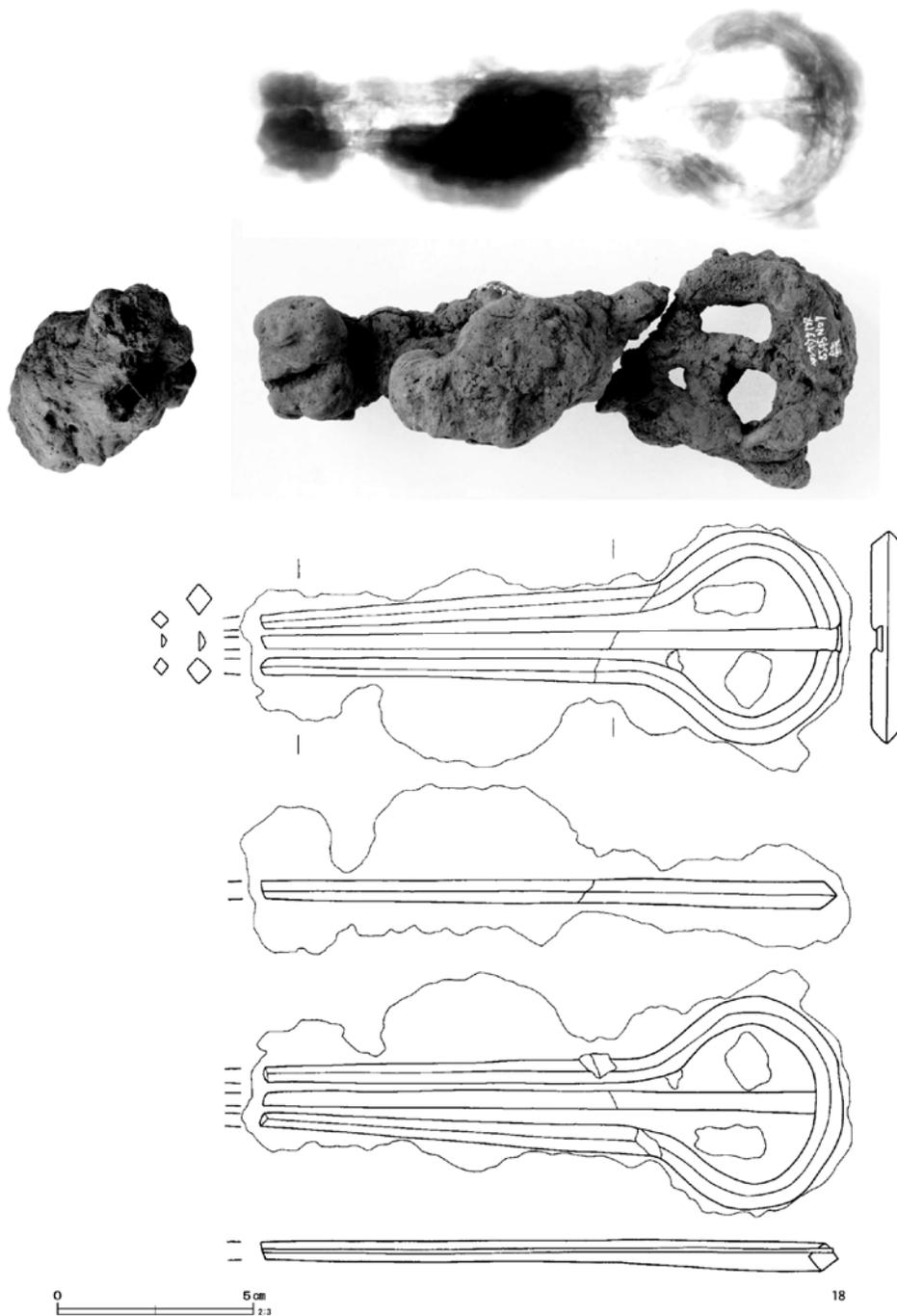


fig. 35 埼玉県羽生市屋敷裏遺跡出土の口琴 [107] のレントゲン写真、写真、実測図。
屋敷裏遺跡。埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書。第 422 集より。
資料の所有及び写真提供：埼玉県教育委員会

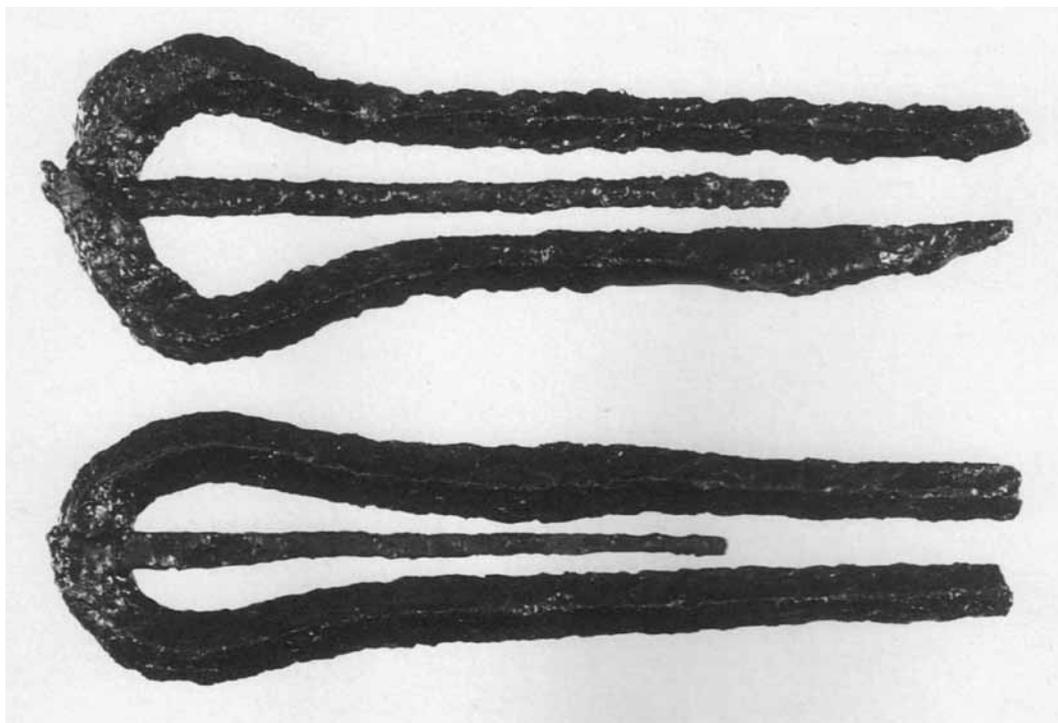
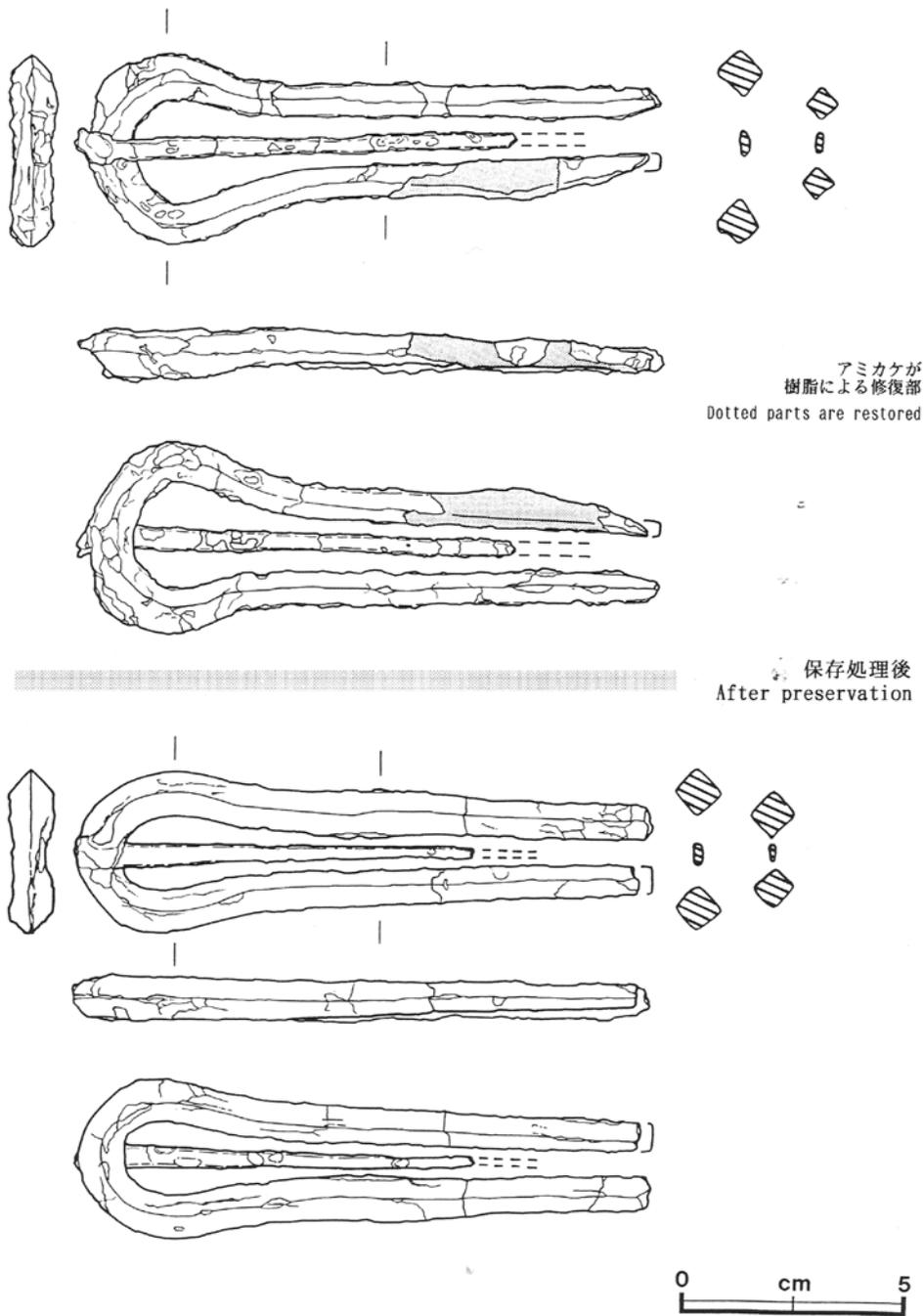


fig. 36 埼玉県大宮市（現さいたま市大宮区）氷川神社東遺跡出土の口琴写真。上から、第一号口琴[108]、第二号口琴[109]。氷川神社東遺跡・氷川神社遺跡・B-17号遺跡。大宮市遺跡調査会報告、第42集。大宮市遺跡調査会より。写真提供：さいたま市教育委員会 fig. 36と37は、オリジナルのまま、180度回転させてはいない。

第3部のおわりに

当初は、全2部で終了する予定であった本チェックリストであるが、新しい出土口琴の情報なども集まり、長期の連載となった。

次稿では、Bタイプの湾曲状の金属口琴の続編として、今回図版を紹介した3本の10世紀の日本の口琴の詳細情報確認から始め、ロシア連邦ケメロヴォ州のエサウルスキイ古墳群の突厥？の遺跡から出土した7-8世紀の遺物の検証、そしてアルタイ、サハ、バシコルトスタンなどに点在する、17世紀頃以降の比較的新しい時代の発掘品を採り上げ、アジアの発掘口琴全体のまとめと考察を行う予定。



註：

fig. 37 埼玉県大宮市（現さいたま市大宮区）氷川神社東遺跡出土の口琴写真。上から、第一号口琴[108]、第二号口琴[109]。氷川神社東遺跡・氷川神社遺跡・B-17号遺跡。大宮市遺跡調査会報告。第42集。大宮市遺跡調査会より

58 Института археологии и этнографии СО РАН 編 2017? による。このロシア科学アカデミーシベリア支部考古学・民族学研究所のインターネット上のニュースには、公開年月日の記載がない。しかしながら、「アルタイの口琴発掘」関連のニュースが、2017年10月12日に発表されたと考えられることから、「2017年10月」前後の公開と考えて間違いないだろう。

同じ科学アカデミーシベリア支部のトロフィムク石油ガス地質学・地球物理学研究所の2017年10月12日付けのニュース(Институт нефтегазовой геологии и геофизики им. А.А. Трофимука СО РАН 編 2017) では、「情報源」の名のもとに、48件のインターネット記事が記載されているが、すべて10月12日以降の記事であり、「情報源」というよりも、「同テーマの別の記事」と考えるべきであろう。アルタイ共和国在住の知人の示唆により筆者が最初にこの情報を知ったのも、そのようなインターネット記事のひとつ(Древнейший комус нашли археологи в Горном Алтае. Новости Алтая, 2017-10-12)であった。

全ての記事を比較検討したわけではないが、口琴の名称ひとつとっても、様々な表記がとられており、情報源の特定が重要であると感じた。

59 Института археологии и этнографии СО РАН 編 2017? による。この時点(2017年10月)では、発掘品の写真は、「詳細な報告書の刊行以前には公表しない方針」により公開されなかった。

60 この情報は、本稿脱稿直前に飛び込んできた。

61 本稿で便宜上付している、各出土口琴の[番号]は、fig.2 写真中の番号には従っていない。

62 fig.29 下部のスケールを基に計算すると、全長は約107mm、幅は約16mm程度と考えられる。厚さの記載は無い。

63 この状態では、演奏中に楽器を保持することができないことから、他の薄板状の口琴[01-09, 12-13]と同様、10-20mm程度の、閉じられた「持ち手」があった可能性が高いと思われる。

64 報告書が刊行されたのかどうかは、2018年1月11日現在、未確認。

65 ただし、長さや幅の推定計測は、現段階では行わない。

66 年代的には、ロシア連邦トゥヴァ共和国アイムイルリグ XXXI 古墳出土の口琴[07](紀元後2世紀)と、同ハカス共和国のサハサル古墳出土の2本[08, 09](紀元後4~5世紀)の間に位置すべきであろう。昨年の拙稿(直川 2017)中の、現時点で最古の中国遼寧省水泉遺跡出土の複数本(2本が確認されている)の口琴(紀元前22~11世紀頃)の情報も含め、通し番号は改めて振り直す必要がある。

67 直川 2016 参照。

68 ヤマロ-ネ Netz自治管区では、発掘例[10]では、振動弁に「肩」があり、引き紐を通す穴が、枠ではなく弁に開けられた A2 タイプであるのに対して、現行のハントイ民族の口琴トゥムランは、振動弁に「肩」が無く、引き紐を通す穴は、枠に開けられている(A3b タイプ)。直川 2016 参照。

69 Bタイプの湾曲状の口琴の番号は、仮に 100 番台とする。

70 Kolltveit 2006では、800以上のヨーロッパの発掘口琴が検証されている。直川 2016も参照。

71 800を超える資料のうちの、唯一の例外なので、年代の推定には慎重になる必要がある。

と思われる。

- 72 この情報の原典は、ロシア科学アカデミー極東支部 歴史・考古・極東民族研究所のアーカイヴ中の、Макиевский С.В.の Отчёт об археологической разведке в Партизанском районе Приморского края в 2013г.//Архив ИИАЭНДВ ДВО РАН. Ф.1. Оп. 2. Д. 748. Л. 17であると Лещенко & Прокопец 2015に明記されているので、いずれ確認したい。
- 73 このロシア連邦沿海地方ニコラエフカ-I土壘出土の口琴こそが、直川 2017の中で「9. 韓国」で [15]として、情報募集中の形で採り上げておいた口琴であった(従って薄板状の口琴 [15]は欠番となり、韓国で口琴が発掘されたという情報は、取り下げる必要がある)。

2016年に中国湖北省武漢で、韓国の音楽学者、權五聖・漢陽大学校音楽学部名誉教授よりいただいた、非常におぼろげな発掘口琴の情報を探るうちに、知人を通して知り合った、田中幸哉・慶熙大学校理科大学教授が、韓国語のインターネット記事(朝鮮日報 編 2015)を見つけてくださったのである。同氏は、永久凍土の研究でサハ共和国を何度も訪れており、サハ語も堪能。口琴の存在を身近に感じてくださっていたからこそその助力であった。記事の内容の日本語訳、そして記事に登場する姜仁旭・慶熙大学校人文大歴史学科教授(同じ大学というのも何かのご縁であろう)をご紹介下さったりと、並々ならぬお力添えをいただいた。心からの謝意を表したい。

姜教授よりの直接の情報により、この口琴がウラジオストクのロシア科学アカデミー極東支部 歴史・考古・極東民族研究所の考古部門に保管されていることも判明、その発掘に携わったレシチェンコとプロコペツの論文(Лещенко & Прокопец 2015)の発見につながった。本項の多くの情報源となっている同論文は、モスクワの口琴研究家ベスクローヴヌィの尽力によりその存在が明らかになった。合わせて感謝したい。

同ロシア科学アカデミー極東支部は、何度か訪問したことがあったが、同地方の先住民族の音楽に関しての情報収集を主目的として民族部門を訪れるのが常であった。考古部門にもできるだけ気を配るようにはしていたのだが、これほど重要な情報が、すぐそばにあったとは気が付かなかった。いずれ機会を見て、考古部門に連絡を取り、出土した口琴の実見を行いたい。

- 74 この情報の原典は、ロシア科学アカデミー極東支部 歴史・考古・極東民族研究所のアーカイヴ中の、Шавкунов В. Э. の Отчёт об археологических работах в Приморском крае в 2007г. Рис. 85//Архив ИИАЭ. Ф.1. Оп. 2. Д. 612. Л. 121である(Лещенко & Прокопец 2015)。
- 75 「時代が下るに従って、大きくなる」という仮説も成り立たなくはないが、早急な断定は避けるべきだろう。
- 76 原典は Шавкунов. Э. В. Некоторые аспекты культурогенеза чжурчжэней в свете новейших археологических исследований // Новые материалы по средневековой археологии Дальнего Востока СССР, 1989. С. 5-11. 図版もあるらしいので、いずれ情報を入手したい。
- 77 渤海交易の結果であるかどうかといった具体的な仮説も含め、より多くの情報収集と、検証が必要である。
- 78 Институт археологии провинции Хэйлуңцзян, Институт археологии АОНК итая. Отчёт о раскопках памятника Тунжэнь в уезде Суйбинь провинции Хэйлуңцзян // Каогусюэбао. 2006. № 1. С. 115 — 139.

参考文献：

Beskrovny, Aksenty.

2013 Jew's Harps in Russian Archaeology (unpublished).

朝鮮日報 編.

2015 말해유적서 초원 악기 '바르간' 첫 출토.

http://news.chosun.com/site/data/html_dir/2015/09/11/2015091100073.html

(参照 2018-01-10) .

福田, 聖.

2016 屋敷裏遺跡. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書. 第422集. (公財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団.

Института археологии и этнографии СО РАН 編.

2017? В предгорьях Алтая две тысячи лет назад была косторезная мастерская. ИАЭТ СО РАН, Новость 163.

<http://www.archaeology.nsc.ru/newsru/163> (参照 2018-01-10) .

Институт нефтегазовой геологии и геофизики им. А.А. Трофимука СО РАН 編.

2017 На Алтае обнаружен один из древнейших в Евразии музыкальных инструментов. ИНГТ СО РАН, Новость. 2017-10-12.

<http://www.ipgg.sbras.ru/ru/news/drevneyshikh-v-evrazii-12102017>

(参照 2018-01-10) .

Kolltveit, Gjermund.

2006 Jew's Harps in European Archaeology. Archaeopress, Publishers of British Archaeological Reports.

Лещенко, Нина, & Прокопец, Станислав.

2015 Средневековые музыкальные инструменты (по материалам памятников Приморья). Россия и АТР. no. 3. p. 222-235.

Liesowska, Anna.

2018 Ancient Jew's harps found in Altai Mountains as musical instruments reappear after 1,700 years. The Siberian Times. 2018-01-09.

<http://siberiantimes.com/science/casestudy/news/ancient-jews-harps-found-in-altai-mountains-as-musical-instruments-reappear-after-1700-years/>

(参照 2018-01-10) .

Макиевский, С. В.

? Отчёт об археологической разведке в Партизанском районе Приморского края в 2013 г. Рис. 44 — 3 // Архив ИИА Э. Ф. 1.О п. 2.Д. 748.Л. 59.

関根, 秀樹.

1991 平安時代の鉄製口琴. 口琴ジャーナル. no. 2. p. 4-5.

直川, 礼緒.

1990 ついに出了! 日本の口琴. 口琴ジャーナル. no. 2. p. 6-7.

- 1994 日本の口琴の源流．日本の音の文化．p. 465-484.
2016 アジアの発掘口琴チェックリスト（1）：薄板状の口琴（1）．伝統と創造 東京音楽大学附属民族音楽研究所研究紀要．vol. 5. p. 57-70.
2017 アジアの発掘口琴チェックリスト（2）：薄板状の口琴（2）．伝統と創造 東京音楽大学附属民族音楽研究所研究紀要．vol. 6. p. 57-68.

Tadagawa, Leo.

- 2016 日本出土の鉄製単簧口弦．第十届国际音乐考古大会 人类学视野下的音乐考古 会议手册．p. 27. Iron Jew's Harps Excavated in Japan 10th ISGMA Symposium 2016 (Wuhan) Music Archaeology from the Perspective of Anthropology Conference Guide. p. 60.

直川，礼緒 編。

- 1990 埼玉県大宮市氷川神社東遺跡出土の口琴に関する新聞記事．
口琴ジャーナル．no. 2. p. 7.

山形，洋一， & 渡辺，正人．

- 1993a 氷川神社東遺跡・氷川神社遺跡・B－17号遺跡．大宮市遺跡調査会報告．第42集．
大宮市遺跡調査会．
1993b 埼玉県大宮市氷川神社東遺跡の口琴 — 発掘の経緯と考察 —. 口琴ジャーナル．
no. 6. p. 4-14.

The Jew's harp is an ancient musical instrument distributed all over the world, especially on the Eurasian continent. Though not as many as in Europe, a certain number of historical Jew's harps have been excavated in Asia. In this third part of the successive articles, Section 12 discusses newly found two remains of lamellate Jew's harps and three uncertain materials under Jew's harp making process from Altai Republic, Russia (3rd century to 5th century A.D.). Section 13 discusses the bow-shaped metal (mainly iron) harps, taking four examples from Primorsky Krai, Russia (5th century to 12th century A.D.), followed by Section 14 on a Jew's harp from Suibin County, Heilongjiang Province, China. At last, Section 15 presents three iron harps from Hanyu and Omiya, Saitama prefecture, Japan (first half of the 10th century A.D.) as an introduction, and their details will follow in the next publication.

(本学附属民族音楽研究所社会人講座講師、日本口琴協会代表)